

私は日本語がわからない（終）

中 村 平 治*

日本語の成句の一つに「首尾一貫」というのがありますが、この「首尾」という組み合わせは意味的におかしいのではないのでしょうか。「始めから終わりまで」の含みをもたせたいのであれば、「首」の上に「頭」がくっついているのですから、「頭尾」と言い替える方がより妥当ではないのでしょうか。なぜ「頭」をさしおいて、「首」が用いられているのか、私にはわかりません。「成句」とはそういうものだ、といった決め方をされると、議論がストップしてしまいます。

魚の鯛については「尾頭付きの」という形容の仕方がありますから、これにのらって「尾頭一貫」と改革してみたらいかがでしょうか。「首」より「頭」を代わりに選ぶ方がより妥当になる例は他にもあります。

肯定とか否定の含みを返答にもたせるときの表現もそうで、「彼女は首を（横に）振った」といった言い方をしますが、この場合も、実際に動くのが目立つのは「頭」ですから、運用により忠実に「頭を振る」に替えてみてはどうでしょうか。「首」から「頭」への代替え案は、実は、英語からの発想です。英語の視点から、以下、日本語の「首」の使い方の当否の議論をしかけたいと思います。

* * * * *

* 福岡大学人文学部教授

先ず、まえがきに続き、「首」の代わりに「頭」を用いる方が妥当だと思われるのに、次の文例があります。

「彼女は僕より首だけ背が高い」

この表現は、正確に捕えると、僕の身長（頭から爪先までの長さ）が彼女の身長の肩までの長さと等しいということですから、「首」は「頭」に替える方がより妥当ではないでしょうか。

"She is taller than I am by a head."

英語にも日本語と同じように "neck" の使用がないわけではありません。

"The horse won the race by a neck."

といった言い方をします。しかし、人間の首と動物の首の長さは全然別です。

勿論、英語の neck と head にも「僅差で」といった漠然とした意味合いがないわけではありませんが、そこは兼ね合いの問題で、実際的には文脈に左右される、つまり文脈によって neck といったり、head といったり使い分けるのではないのでしょうか。しかし日本語には「首」だけの使用しかありません。「頭の差で勝った」といった言い方はありません。日本語の場合も、英語にならって、「首」を引き下げ、「頭」を採用したらいかがでしょうか。そのほうがより合法的な選択になると思われるのです。

日本語の「首」を「頭」に替える方が決定的に良くなる例を、次に加えます。英語では次の付記の（ ）内の対応表現に見る通り head の使用が固定しています。

「彼は窓からひょいと首を出した」

(He popped his head out of the window.)

「彼は首をかしげた」

(He leaned his head to one side.)

文脈の動作が対象に求めるのは、「頭と首」であり、また head and neck ですから、両方を共に目的語にすればいいのですが、言葉の経済性から、どちらか一方を、代表者を、となると、日本語では「首」と英語では head となるのでしょう。私は英語の選択のほうが、実際の動作により近いと考えるから、日本語の「首」の使い方は「頭」に改めたらと提案しているのです。

生々しい文例で恐縮ですが、次の場合も、動作の求める対象は「首」より「頭」を選ぶ方がより合法的だと私には思われます。

「敵将の首をとってこい」

(Get me the head of the enemy.)

「大将が刀であいつの首を切り落とした」

(The boss cut off his head by a sword.)

「お前は首がないゾ」

(You shall lose your head.)

これまでの例は、「首」を「頭」に置き換える方が好ましいという主張でしたが、これから指摘するのは、「頭」以外の「言い回し」に替える方が、国際的に理解され易くなると思われる例です。

* * * * *

該当の例に「比喩」表現があります。これは「比喩」の働きが「或る事柄を叙述するのに他の類似した事柄を借りてきてそうする」ことにあるのですから、起こるべくして起きる表現の仕方です。つまり問題の「首」の使用が日本語独特のものであって、他の「言い回し」に替えないと、他言語話者に通じなくなるからです。次の例がそうです。

「僕はあなたのお帰りを首を長くして待っています」

「首を長くする」が「比喩」表現です。この含意は日本人にとって何でもありません。解説を加えるまでなく自明です。一般に広く慣用されている表現でもあります。

しかし、英語に直訳すると、どうなるでしょうか。

"I'll be waiting for you to come back, making my neck long."

英語にも "make a long neck" という表現があることから、通用しないわけではありません。でも、含意が日英語で違っています。日本語の含みが「熱望して」であるのに対して、英語の含みは、運動をするときの、腕とか首を「伸ばして」であるからです。ですから、日本語を正当な英語に移すには「首・・・」を他の「言い回し」、即ち "eagerly" に替えなければなりません。次のように移し変えないと、国際的に通用する表現にはなりません。

"I'll be waiting eagerly for you to come back."

それでは、日本語の方も英語に倣い、「熱望して待っています」に替えたらという意見がでてきそうですが、そこまでは私はコマを進めません。表現とし

での迫力に欠けるからです。そこで、国内向けと国外向けに適宜使い分けてみては、いかがでしょうか。次の例の「比喩」表現は、国外向けとして、「首」以外の他の「言い回し」に替えるのです。

「いろんなことに首を突っ込んだが、みなものにならなかった」

"I poked my nose into everything, but in vain."

「借金で、私は首が回らない」

"I am over my head in debt."

「謎を解くのに、首をひねった」

"I thought hard to solve the riddle."

即ち、上の日本語は独特の表現ですから、英語の表現を借り、次のように「首」を他の「言い回し」に替えるのです。そうすると、国際的に通用する言い方になります。

「いろんなことに鼻を突っ込んで思案してみたが、ものにならなかった」

「借金で、頭での考えがまとまらない」

「謎を解くのに、頭で一生懸命考えた」

もう一例、「娘さんを首に縄をつけてでも、連れ帰ってこい」という表現も、映像化としては面白いのですが、しかし、文字通りだと、娘さんを犬畜生扱いにすることになり、また現実には生起しがたい行動になりますから、含意を十分に汲み取り「娘さんを、手こずってでも、連れ帰ってこい」に替えてみてはいかがでしょうか。

「比喩」表現における「首」から「頭」へ、またその他への「言い替え」の提案は上の程度にとどめて、次に、もう少し初頭で触れた、「普通 (normal)」

の表現における「言い替え」の事例を加えておきます。

「赤ん坊の首が座っていない」→「頭がふらついている」

「部長の首をすげ替える」→「頭を替える」

「彼はがっかりして、首を垂れていた」→「頭を垂れていた」

「彼女は首をすくめた」→「肩をすくめた」

* * * * *

以上、日本語の「首」の設定は、実際の行動に合致せず、また国際的な見地からも非合法的なので、これに合わせるため「頭」やその他の「言い回し」に替える方がすっきりする旨、説いてきました。ここでは論説のバランスをとるためにも、逆になる、つまり、日本語の言い方が合法的で対応の英語表現の方が理に反するような事例をいくつか挙げてみます。次の文の目的語に注目されたい。

「太郎は首の骨を折った」 vs "John broke his neck-bone."

「太郎は首を折った」 vs "John broke his neck."

日本語では「首の骨」と叙述するのが正常な言い回しで、ただ単に、「首」だけでは「折る」との結合ができない。「折る」が何か棒状の固いものを対象するのに対して、「首」では何か柔らかい肉片でしかないし、組み合わせられないからです。この見方は、堅実で合理的な認識です。日本語はこの認知に乗っ取っているだけに合理的な目的語の設定になります。

しかし、英語ではただ単に「neck」と叙述するだけでよく、日本語的に「neck-bone」とするほうが間違いなのです。この点で、論理性において、日

本語は英語に勝ると言えます。

英語の「比喩」に関してですが、この場合も、個別的すぎるので、少なくとも日本人に理解してもらうには論点の「neck」その他の表現を別の「言い回し」に替える方が望ましいと思われる事例を挙げます。


I've no time to see you. I'm up to my neck in work.

I can't afford a new car. I'm up to my neck in debt.

I had hard time. I'm up to my neck in trouble.

問題な（この「な」はどこかで聞いたような使い方です）表現は「・・・のことで、私は首までどっぷり漬かっている」という英語独特の喩えの仕方です。この「言い回し」から、「即、私は身動きができない」を英語話者よろしく連想できる日本人はそう多くはないのではないのでしょうか。連想できなくて当然です。日本語独特の表現法なのですから。

そこで日本人だけでなく、国際的にも論点の "I'm up to my neck in..." を正当に理解してもらうため、"I'm deeply concerned with..." か、またこれと意味的に類する「言い回し」に替えてみてはいかがでしょうか。表現が飛躍するかもしれませんが、次の言い替えはどうでしょう。

I'm up to my neck in debt.  I'm concerned with debt.
I owe a lot of money.

なお、日本語でも「借金で首が回らない」といった表現をしますが、これも英語の言い替えに倣い、「・・・のことで心配で・・・」とか「・・・で身動きできないので・・・」に置き換えると、万国共通に理解される表現になるでしょう。

* * * * *

以上、「首」の使用を巡って日英語の違いにスポット・ライトを当ててきましたが、ここで、共通する面を指摘しておきます。

首を引っ込める (draw in his neck)

首をすくめる (shrink back his neck)

首を伸ばす (stretch his neck)

首にスカーフを巻く (wrap a scarf around her neck)

動詞に先行する目的語への設置として、日英語共に共通する面があるということは、偶然の一致かもしれませんが、一応、国際的にも通用する表現とみて良いでしょう。

ここでもう一踏ん張りし、資料を、遠野圭吾氏の人気小説「手紙」に絞り、そこで使用されている「首」の動詞との統語性を、関わる身体部分との比喻で捕えておきます。

(1)「首」は例えば、動詞「振る」の目的語として用いられる。「首を縦に(横に)振る」とも、また単に「首を振る」とも言える。「首を縦に振る」は代わりに「頷く」とも言える。「頷く」に対する語はない、しいて挙げると「首を横に振る」であろうか。このとき「首」は「かぶり」に言い替えることができる、が、「ひらがな」であって「漢字の頭」ではないことに注目したい。「かぶり」は「頭」の古い言い方であるが、いつ頃から、またなぜ、今日でも「頭を振る」とは言わないのか、私には不明である。もっとも一例だけ「頭をゆらゆらと振った」が見出せた。

要するに「首を振る」というのが一般的で「かぶりを振る」は例外的な存在である。「振る」という動作は縦も横も日本語では共通するが、英語では nod

vs shake で区別する。これらの目的語も head であって、neck ではないので念のため。

(2) 動詞が「上げる」「下げる」「出す」「傾げる」だと、目的語は、日英語ともに「頭」でも「顔」でもかまわない。構わないが、日本語では「顔」を選ぶ方が、英語では head を使う方がより一般的な傾向のようである。このことは「() を窓から出してはいけぬ」の括弧内に「顔」と「頭」のどちらが入りやすいかを考えて見るとよい。

日本語で両方共に可能だといっても、視覚作用が強く意識されるときは、当然のことながら、「顔」が優先される。「彼はわずかに() を上げ、弟に目を向けた」の例がそうである。「両手を畳につけ、() を深々と垂れた」の場合も文脈的に自ずから選定される。

(3) 論考の中心である「首」の活躍振りを他の例をいくつか引用することで、かいま見よう。

「直貴は首を振った」

「直貴は首を傾げながらドアを開いた」

「直貴は首を捻った」

「直貴は小さく首を縦に動かした」

(4) 「首」の働き様を組織の中の一端として見渡すため、「首」の周辺に位置する身体部品も加えて、動詞との統語性を調べてみよう。次の表は「手紙」だけからの組み合わせであるが、一般性はかなり高いとみられる。?印は当資料に見出せないことを示す。

動 詞	目 的 語				
	首	顔	頭	肩	かぶり
上げる	?	+	+	?	?
下げる	?	+	+	?	?
動かす	+	?	?	?	?
振る	+	?	+	?	+
垂れる	?	?	+	?	?
出す	?	+	+	?	?
折る	+	?	?	?	?
捻る	+	?	?	?	?
抱える	?	?	+	?	?
すくめる	?	?	?	+	?
傾げる	+	+	+	?	?

上記表の読み方であるが、「+」印は、動詞の、例えば「傾げる」が「首」と統語関係を正常に持ちうることを示す。「?」印は、他の言語資料に例文が見出せれば「+」に、見出せなければ「-」に、つまり関係が成立しなくなることを示す。

要 約

全般的に見て、日本語の「首」の使用は出しゃばりすぎるように思われます。目的語の構成員として「首」と「頭」のどちらを優先的に選ぶのかを巡って、先人争いをするとき、関わる動詞の内容からくみするのに不適當と思われる場合でも、頭角を現わすのですからね。

例えば「窓から外に（ ）を出したらいかん」と発するときも、「私はイヤだと（ ）を横に振った」と断るときも、「首」が「頭」を制して、空席に座

るつまり動詞の内容が「頭」をひいきにしているもそうなのですからね。その他、内容的に「首」が「頭」を押し退けている例に、「敵の（ ）を切り落とした」「（ ）を傾げた」、「がっかりし、（ ）を垂れていた」などがあります。これらの（ ）内には、英語では実動に忠実に head が選出されます。日本語の「首」には反面教師みたいな面がありますよね。

他に、「（ ）尾一貫」とか「上首尾」という成句も「全部」、即ち「頭の天辺から足の爪先まで」とか「徹頭徹尾」「竜頭蛇尾」の含みを持たせたいのであれば、自ずから、出番が決まるのですが、これも2番手の「首」がのさばります。

もう一件、「首」の出しゃばりは「比喩」表現にもその雄姿を現わします。「私は借金で（ ）が回らない」にも「問題を解くのに（ ）を捻った」にも「首」が登場します。この場合も「頭で苦労して考えても、埒があかない」といった含みになるのですから、「頭」を使用するのが適切だと思われるのですが…

「首」が「頭」の機能に深く食い込んでいるのは、成句の「雁首をそろえる」に端的に認められます。雁首（がんくび）とは、即、頭部と同じだからです。これが「首」の正体だとすると、「頭」とか「顔」との入れ替えが領けるかもしれませぬ。